

強交差現象再考

西岡, 宣明

九州大学大学院人文科学研究院文学部門英語学・英文学 : 助教授 : 英語学

<https://doi.org/10.15017/1190>

出版情報 : 文學研究. 100, pp.71-89, 2003-03-31. Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :

強交差現象再考

西 岡 宣 明

1. 序

代名詞は(1)のような例において、ある特定の対象を指す指示的 (referential) 解釈と、その解釈が非指示的な (nonreferential) wh-句や数量詞句 (Quantifier Phrase: QP) に依存する束縛変項 (bound variable) 解釈の両方の解釈が可能である。

- (1) a. Every man thinks *he* is the best.
b. Who dislikes *his* boss?

しかし、(2)では束縛変項解釈はできない¹。

- (2) a. *Her_i father believes that every girl_i is happy.
b. *His_i mother wonders who_i Jane saw t_i

(1)(2)の文は、それぞれ、(3)(4)のような LF 構造をもつと考えられ²、この違いをとらえるため代名詞の束縛変項条件(5)が提案されている。

- (3) a. [_{TP} every man_i [_{TP} t_i thinks he_i is the best]]
b. [_{CP} who_i [_{TP} t_i dislikes his_i boss]]
(4) a. [her_i father believes [_{CP} that [_{TP} every girl_i [_{TP} t_i is happy]]]]
b. [his_i mother wonders [_{CP} who_i [_{TP} Jane saw t_i]]]

- (5) A pronoun P is construed as a variable bound by a quantifier Q only if Q binds P at LF.³ (Lasnik and Stowell 1991 : 688)

しかし、この統語条件は束縛変項解釈のための必要条件ではあるが、十分条

件ではないことは以下の例により示される。

- (6) a. *Who_i did you say he_i made you visit t_i
b. *He_i saw me visit everyone_i
- (7) a. *_{[CP} who_i did [you say [_{CP} he_i made you visit t_i]]]
b. *_{[TP} everyone_i [_{TP} he_i saw me visit t_i]]⁴

(6)の各文のLF構造を示したのが(7)であるが、ここには、(5)の違反はないが、wh-句/QPの移動により生じた痕跡変項が、代名詞変項にc-統御(command)されていて(6)の文はいずれも代名詞の束縛変項解釈はできない。この現象が強交差 (strong crossover: SCO) と呼ばれる (Wasow 1972, Postal 1971) ものである。従来、GB理論においてSCOは、束縛理論の条件C違反として説明されてきた (Chomsky 1981)。

- (8) 束縛条件A : An anaphor is A-bound in its governing category.
B : A pronominal is A-free in its governing category.
C : An R-expression is A-free.

すなわち、wh-句やQPの痕跡変項は束縛条件に関して固有名詞 (e.g. John) や定名詞句 (e.g. the man) の指示表現 (R-expressions) と同様に振舞うものと考えられ、(6)/(7)は、(9)が許されないのと同じ理由で排除された。

- (9) *He_i thinks that John_i/the man_i is the best player in the team.

本稿では、SCOを束縛条件Cで説明することの問題点を指摘し、代案を提出する。まず、次節で、痕跡変項が束縛条件Cに従うと仮定することの理論的、経験的問題点を論じ、3節で英語の否定対極表現(NPI)の分布を説明するために出した西岡(2002)、Nishioka(2002b)の分析の要点を概観した後で、そこに見られる認可・被認可表現に関する一般制約を述べる。4節でその制約の一般性を論じ、SCOは束縛条件Cによるのではなく、その一般制約により捕えられることを主張する。5節で残された問題を述べ、6節で論をまとめる。

2. 従来の分析の問題点

SCOの束縛条件Cによる分析、すなわち痕跡変項が束縛条件Cに従うと仮定することの第1の問題点として話題化 (Topicalization) に伴う再構築 (reconstruction) に関するものがある。(10a) (11a)の例は話題化構文であるが、この構文に対しては従来、空演算詞(NO)移動を想定する分析(Chomsky 1977, 1981) と話題化要素そのものが移動する分析 (Baltin 1982, Lasnik and Saito 1992) が提案されてきた。(10b, c) (11b, c)はそれぞれの分析による(10a) (11a)の派生を示したものであるが、いずれの分析においても痕跡が束縛条件Cに一律に従うと考えると(10a)は正しく排除されるが、(11a)も誤って排除してしまい、SCO効果の有無を正しく区別できない。

(10) a. *Tom_i he_i thinks Sue loves.

b. Tom_i [NO_i he_i thinks t_i' Sue loves t_i]

c. Tom_i he_i thinks t_i' Sue loves t_i

(11) a. Himself_i he_i thinks Sue loves.

b. himself_i [NO_i he_i thinks t_i' Sue loves t_i]

c. himself_i he_i thinks t_i' Sue loves t_i

この問題は、移動したものの違いを痕跡に反映させるいわゆる再構築が必要であることを示しているが、この点において(b)の派生よりも(c)の派生の方が直接的に再構築をおこなえるという点で優れているといえる。痕跡の位置(t/t')で話題化要素が束縛条件の適用を受けると考えると(10a)は束縛条件Cにより排除され、(11a)は束縛条件Aによりその文法性が正しく捕えられる。ではそもそもなぜ再構築が許されるのかという点が疑問となるが、Chomsky (1993)が提案した移動した後には移動したもののコピーが残るとするという

- d. Moby Dick_i was brought [NO_i for Bill to read t_i]
(purpose clause)

この違いを捕えるために Chomsky (1986b) は、(16)のように束縛条件Cを修正することを提案している。

- (16) An R-expression must be A-free *in the domain of its operator*.
(Chomsky 1986b : 86)

(16)のように「演算詞領域の中ではA-束縛されてはいけない」という旨の演算詞領域の概念を導入することにより、(15)の文は束縛条件C違反が回避される。しかし、このように束縛条件Cに特別な規定を盛り込むことは理論的に好ましくないばかりか、以下のような寄生空所 (parasitic gap) に関する事実を説明できないという点で経験的にも問題がある⁶。

- (17) a. *Who_i t_i gossiped about you [despite your having vouched for e_i]
b. Who_i did you gossip about t_i [despite your having vouched for e_i]

寄生空所構文も(18a)のように付加詞内で島の制約をうけることから付加詞内での演算詞移動が示唆され、付加詞内でのNOの移動を伴う構文であると考えられる (Chomsky 1986a)。

- (18) a. *Which book_i did you read t_i [before Fred met someone who reviewed e_i]
b. Which book_i did you read t_i [before Fred said that you reviewed e_i]

従って、(17)の文はそれぞれ(19)のような構造をもつと考えられる。(19a)では、NOの痕跡がwhoの痕跡にc-統御されているが、(19b)ではそうではないため、その対比は痕跡変項が領域の規定を盛り込まない束縛条件C (8C)に従うと考えればうまく説明できるが、(16)では(17a)の非文法性を捕えられない。

- (19) a. *who_i t_i gossiped about you [NO_i despite your having vouched for t_i]
b. who_i did you gossip about t_i [NO_i despite your having vouched for t_i]

(17)に基づく、束縛条件Cにはこのような領域の規定は盛り込まない方が好ましいといえるが、その場合今度は(15)の文法性をいかに保障するかが問題となる。この問題に対して、Lasnik and Stowell (1991 : 714) は NO の解釈のために叙述 (Predication) 規則が働くとされる(15)の例は以下の規定により例外的に取り扱うことを提案している。

- (20) If an A-position X A-binds a category Y as a result of Predication (or control), then Condition C does not apply to A-binding of Y (or its chain) by X.

すなわち、NO の痕跡変項は、寄生空所(17)/(19)の場合は叙述規則により NO が特定の A-位置に束縛される構文ではないために(20)の適用を受けないが⁷、(15)の場合は(20)により例外扱いされるといえるものである。しかしながら、この分析では以下のような例が説明できないという決定的な問題がある。

- (21) John_i thinks that Mary should marry him_i, who_i t_i can take care of her parents.

この例において、叙述規則に基づく分析において叙述規則で関係づけられるのは関係代名詞 who とその先行詞 him であり、(21)の主節主語 John は演算詞 who と叙述規則によって直接結びつけられている訳ではない(すなわち、関係代名詞が特定の A-位置に束縛されることを要求するものではない)ので、領域を規定しない束縛条件(8C)では、(20)を想定しても誤って(21)のような関係代名詞を含む文も排除してしまう。すなわち、結局束縛条件Cに領域を設けても設けなくても問題が生じる。このことは、痕跡変項を束縛条件Cによって説明しようとする自体に問題があることを意味する。

もともと GB 理論において演算詞の痕跡が束縛条件 C に従うという考えは、(22)に示すように空範疇を [+/-anaphoric] [+/-pronominal] という観点から分類、記述しその分布を束縛条件によって捕えようとする理論的意義の下での提案であった。(Chomsky 1981)

- (22) a. NP 移動の痕跡 ([+a, -p]) 束縛条件 A に従う
 b. pro ([-a, +p]) 束縛条件 B に従う
 c. PRO ([+a, +p]) 束縛条件 A, B に従う
 → PRO は統率 (govern) されてはいけない (PRO Theorem)
 d. 演算詞移動の痕跡 ([-a, -p]) 束縛条件 C に従う

具体的にみると (22a) に関しては、(23) の非文法性を束縛条件 A の違反として捕えようとしたものであった。

- (23) a. *Mary_i seems/is believed [John to like t_i]
 b. *John_i seems/is believed that [t_i likes Mary]
 c. *Mary_i seems/is believed that [John likes t_i]

(23) のいずれの文も括弧で表した統率範疇内で NP 移動の痕跡が先行詞に束縛されていないので束縛条件 A により排除される。しかしながら、これらの例はすべて格を照合される位置からまた格を照合される位置へ移動しており、ミニマリストプログラム：MP (Chomsky 1993, 1995) の経済性の原理の 1 つである Greed によっても排除される ((23a, c) は移動先により近いものがありながらそれを飛び越える移動を行っている Shortest Move/Minimal Link Condition 違反でもある)。すなわち、NP 移動の痕跡の分布は独自に捕えられるのであるから、(22a) は不要である。また、MP では統率という概念そのものを認めない立場をとっており、PRO の分布は PRO にゼロ格 (null Case) を捕えようとする分析 (Chomsky and Lasnik 1993) が正しいとすると (22c) も不要である。従って、MP の分析が正しいとすると、空範疇を (22) のように体系的に取り扱おうとする意義はなく、(22d) も理論的な意義はないといえる。

以上、本節では演算詞の痕跡は束縛条件 C に従うと仮定することにより SCO を説明しようとする分析の問題点を述べてきた。SCO が束縛条件 C によらなくても独自に説明できるのならこれらの問題を回避できるという意味においてその分析の方が好ましいといえる。

3. 西岡 (2002)、Nishioka (2002b)

西岡 (2002)、Nishioka (2002b) では英語の否定対極表現 (NPI) の分布を説明するのに新たな分析を提案した。本節ではその要点を概略する。

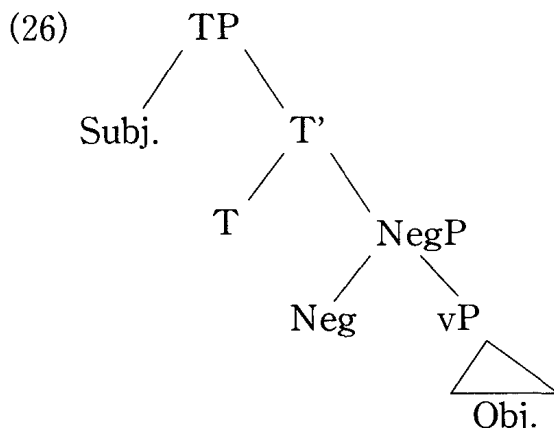
従来、NPI の分布は、否定要素による c-統御条件(24)に従うものと考えられてきた⁸。

(24) NPIs are licensed by being c-commanded by an overt negative element (at S-structure). (Klima 1964, Laka 1990, Acquaviva 1987)
これにより、(25)にみられる NPI の分布に関する主語と目的語の非対称性がうまく捕えられる。

(25) a. **Anyone did not eat apples.*

b. *John did not eat anything.*

(26)に示されるように主語は目的語と違い、否定要素 not (Neg) に c-統御されない。



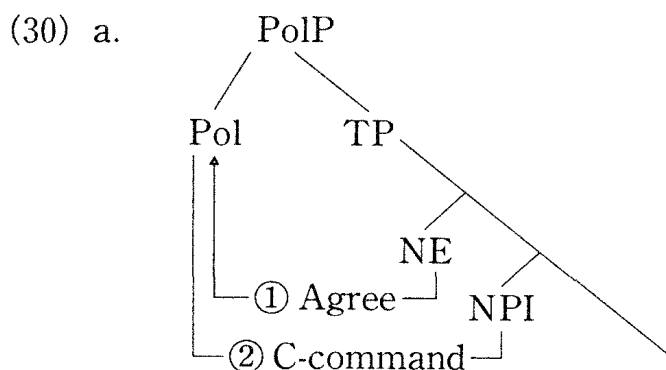
しかし、(24)では以下のような例が説明できない。

- (27) a. Even then the writers of *none* of the reports thought that *any* rain had fallen *anywhere* else. (Klima 1964 : 278)
 b. I gave pictures of *no* one to *anyone*. (Ota 1981 : 22)
- (28) a. Pictures of *anyone* did *not* seem to be available. (Boeckx 2000 : 362)
 b. A good solution to *any* of these problems does *not* exist. (Hoeksema 2000 : 136)

(27)は、否定語句が埋め込まれていて NPI を c-統御していないにも関わらず文法的な例であり、(28)は、NPI が主語内に埋め込まれていて否定要素 (not) に c-統御されていないのに文法的な例であり、いずれも (24) の反例である。これらの例を適切に捉えるために西岡 (2002)、Nishioka (2002b) では節構造として TP の上に PolP を想定した上で、以下の分析を提案した⁹。

- (29) a. 文否定は TP 内の否定要素 (NE : not, never, no…等) と Pol との Agree に基づき否定要素の (解釈可能な) 否定素性が Pol に存するものである (①)¹⁰。
 b. NPI は、否定要素に直接認可されるのではなく、Pol の否定素性に c-統御されることにより認可される (解釈規則) (②)。
 c. 否定要素と Pol との経路にある NPI は否定要素と Pol との Agree を阻止する (③)¹¹。

具体例に照らして説明する。(25b) の例に対してこの分析を概略したのが以下である。



(25) b. John did *not* eat *anything*.

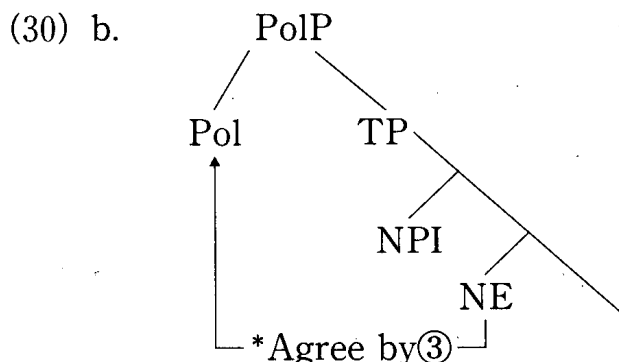
まず、NE (not) と Pol とが Agree に基づき NE の否定素性が、Pol に存し (①)、その結果 NPI (anything) は、Pol にある否定素性により c-統御され、適切に認可される (②) ので何の問題もない。この分析では、(24)の問題としてあげた(27)も同様にうまく説明できる。

(27) a. Even then the writers of *none* of the reports thought that *any* rain had fallen *anywhere* else.

b. I gave pictures of *no* one to *anyone*.

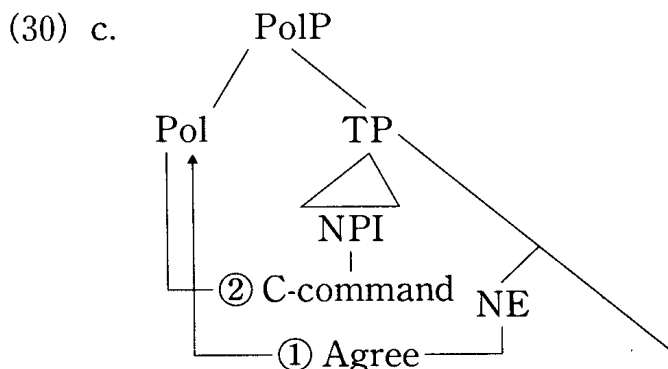
すなわち、NPI は否定要素に直接認可されるのではなく、Pol を通して認可されるとすると否定要素自体が NPI を c-統御していなくても問題とならない。

他方、(25a)に対する分析を表したのが(30b)である。



(25) a. **Anyone* did *not* eat apples.

ここでは、NPI が NE と Pol との経路にあるため Pol と否定要素との Agree が成立せず、NPI が認可されないばかりか、派生が破綻するため非文法的となる。この分析は(28)のような例も正しく捕える。



(28) a. Pictures of *anyone* did *not* seem to be available.

(Boeckx 2000 : 362)

b. A good solution to *any* of these problems does *not* exist.

(Hoeksema 2000 : 136)

ここでは、NPI が主語に埋め込まれて経路にないため Pol と NE との Agree を阻止しない。従って、Pol に否定素性が存し(①)、その結果 NPI は適切に認可される (②)。

NPI の分布の非対称性は二重目的語構文の目的語間にも見られる。

(31) a. I gave *no one anything*.

b. *I gave *anyone nothing*.

二重目的語構文では間接目的語 (IO) が直接目的語 (DO) を非対称的に c-統語しているとする (Larson 1988, Bruening 2001)、(31a) は (25b) と同様に (30a) に示されるように NPI がうまく認可されるが、(31b) は、(25a) と同様に (30b) のメカニズムにより排除される。また、NPI が IO 内に埋め込まれた (32) の文法性も (28) と同様に (30c) のメカニズムによりその文法性が捕えられる。

(32) I gave students who skipped *any* class *no* grade.

さらに、話題化構文に関しても、Pol が話題化された要素より上位にあると仮定すると、(33) の対比も同様にうまく説明できる。

(33) a. **Any* student I did *not* invite to the party.

b. A solution that is *any* better I have *not* been able to find.

(Hoeksema 2000 : 130)

(33a) の非文法性は、(30b) のメカニズムで排除され、(33b) の文法性は (30c) のメカニズムで保障される。

すなわち、この分析は、NPI の否定要素による認可の問題を NPI による Pol と否定要素との Agree に関する干渉の有無という点から捕らえなおしたものであるが、この分析から次の一般制約が導き出せる。

- (34) 被認可表現 (licensee : LEE) (e.g. NPI) は、認可表現 (licenser : LER) (e.g. NE) の Agree/Move の経路にあってはいけない。

4. 認可・被認可表現に関する一般制約

(25) (25) (33) のような文の容認性の違いに気づき、一般制約として提出したものとして Kuno (1995) の (35) の制約がある。すなわち、これらの例で非文法的なのは、すべて (35) の違反を伴う。前節で述べた西岡 (2002)、Nishioka (2002b) の分析は実のところ Kuno の観察に負う所が大きい。しかしながら、(35) は表示に関する制約であるのに対し、(34) は派生に関する制約である点が決定的に違う。

- (35) Anti-Superiority Condition on Licensees (S-Structure Condition):
A licensee must not be syntactically superior to its licenser. That is, a licensee cannot both precede and (PP-invisible-) c-command its licenser.

N.B. PP-invisible-c-command: Node α PP-invisible-c-commands node β if the first non-PP branching node that dominates α dominates β , and α does not dominate β .

この違いは、以下のような例に対する説明力の違いに反映される。

- (36) a. * $[Any\ student]_i^{LEE}$ I did *not*^{LER} invite t_i to the party. (= (33a))
b. $Himself^{LEE}$ $John_i^{LER}$ likes t_i best.

(36a) の非適格性は、前述の通り、(34) (35) のいずれでも捕えうる。ところが、(36b) では、移動しているのは被認可表現 (himself) であり、その経路にあるのが認可表現 (John) であるため (34) の違反はないのに対し、被認可表現 (himself) が S-構造において認可表現 (John) より構造上優位な位置にあるため (35) の違反がある。すなわち、(35) は誤って (36b) を排除してしまう。また、以下の例に対しても違いがある。

(37) a. ???[John-to Mary]_i-o^{LER} otagai_i-ga^{LEE} mita
 (Miyagawa 1997 : 4)

b. [John-to Mary]_i-o^{LER} [otagai_i-no^{LEE} sensei]-ga mita
 (Miyagawa 1997 : 5)

(37a)ではS-構造において被認可表現 (otagai-ga) が認可表現 (John-to Mary) より構造上優位な位置にはないので(35)ではその容認性の低さが捕えられないが、(34)ではその違反としてうまく捕えられる。また、(37b)は被認可表現を埋め込むことにより(34)の違反が回避された例として(34)で予測される通りである。

以上みたように派生制約として(34)が独自に必要なといえる。しかし、もしそうだとすると、2節で述べたSCOに関する問題の答えも自明である。

(6) a. *Who_i did you say he_i made you visit t_i

b. *He_i saw me visit everyone_i

(7) a. *[_CP who_i did [you say [_CP he_i made you visit t_i]]]

b. *[_TP everyone_i [_TP he_i saw me visit t_i]]]

2節で(6)のようなSCOの例(LF表示(7))を束縛条件Cで説明することの問題点を論じたが、被認可表現の定義を(38)のように考えると束縛変項代名詞はWh句/QPに認可される被認可表現と考えられる。

(38)被認可表現…独自の指示対象をもたず、解釈が認可表現に依存するもの。
 そうだとすると、(6)/(7)の非文法性は(34)の違反によるものに他ならない。

5. 残された問題

本稿の主張は、SCOは独自の文法制約(34)で捕えられるべきであり、束縛条件Cで説明する必要性はないというものである。またそれは移動変項の振舞いは束縛条件Cで捕えるべきではないという強い主張を伴う。しかし、では、従来束縛条件Cで説明されてきた移動変項の振る舞いがすべて(34)で捕えられるかという、答えは現時点では不明である。重要な問題として、2

節で述べた寄生空所に関する主語・目的語の非対称性の問題が残る。

- (19) a. *who_i t_i gossiped about you [NO_i despite your having vouched for t_i]
b. who_i did you gossip about t_i [NO_i despite your having vouched for t_i]

この問題に対しては現時点で2つの可能性があると考えている。1つは、付加詞節からの抜き取り (Agree/Move) は(39)に示されるように、通例できないが、(19b)のような寄生空所が可能なのは、Richards (1997) の Principle of Minimal Compliance (PMC) (40)のような原理によるものと考えられる。すなわち、付加詞節が vP に付加しているとする、主節の C と目的語との合法的な関係があるため C と付加詞節内との関係づけも許されるようになるというものである。(19a)でそれが不可能なのは、(19b)と違い、付加詞節が主節 C と主語との関係の経路にないため(40)が働かないことに帰せられる。

(39) *Who_i did they leave before speaking to t_i ?

(40) PMC: For any dependency D that obeys constraint C, any elements that are relevant for determining whether D obeys C can be ignored for the rest of the derivation for purposes of determining whether any other dependency D' obeys C.

An element X is relevant to determining whether a dependency D with head A and tail B obeys constraint C iff

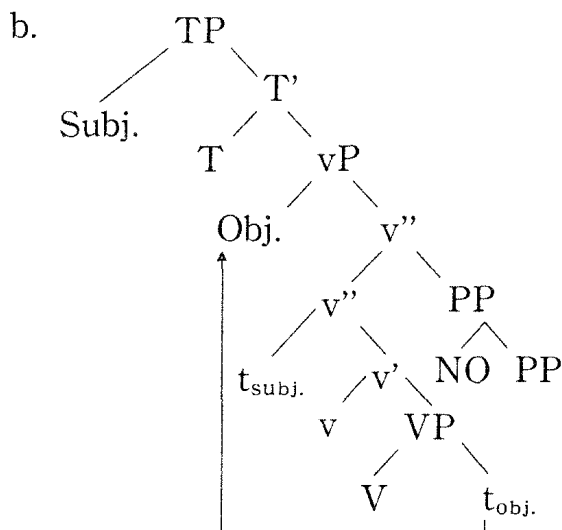
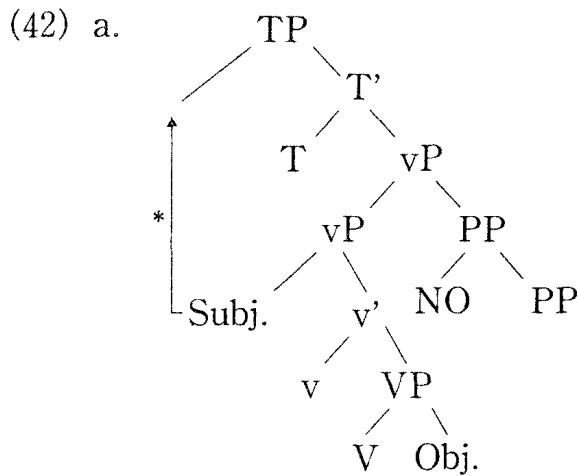
- a. X is along the path of D (that is, X=A, X=B, or A c-commands X and X c-commands B), and
b. X is a member of the class of elements to which C makes reference.

もう1つの可能性は、Chomsky (2000) の Phase Impenetrability Condition (PIC) (41) と関係づけて(34)を援用する方法である。

(41) PIC : In phase α with head H, the domain of H is not accessible

to operations outside α , only H and its edge are accessible to such operations.

すなわち、寄生空所構文が寄生空所に相当する NO が付加詞に付加し、その付加詞全体が vP に付加した構造を含んでいるとすると、(42a) のように被認可表現である NO が主語 wh 句の [Spec, TP] への Agree/Move の経路にあり、(34) の違反を生じているといえる¹²。他方、目的語 wh 句の場合、(41) により、一旦、[Spec, vP] へ入り [Spec, CP] へと上がっていくと考えられなければならない。その際 (42b) のような派生が許されるとすると、NO は目的語 wh 句の Agree/Move の経路にはなく、(34) の違反を伴わない¹³。



詳細な分析は今後の研究に残し、稿を改めて論じたい。いずれにしても寄生

空所の例 (19a) も独自に説明が可能であると考えられ、束縛条件Cで移動変項の振る舞いを説明する必要性はないと結論づけられる。

6. まとめ

本稿では、SCO 現象を痕跡変項が束縛条件Cに従うという仮定で説明した従来の分析 (表示に関する制約) の問題点を指摘し、NPI の分析を基に独自に動機づけられた認可・被認可表現に関する一般制約 (派生に関する制約) (34) を代案として提出した。(34) のさらなる一般性が証明されれば、本稿での主張の妥当性も高まると言えるのが、その議論は稿を改めて論じたい。(一部は Nishioka 2002b 参照。) また、(34) は(43) のような弱交差 (weak crossover : WCO) 現象に関しては、何もいえない。

- (43) a. *Who_i does his_i boss dislike ?
b. *His_i friends should mistreat no man_i.

交差現象全体を視野にいたした分析、すなわち SCO と WCO は全く別の原理によって説明されるのか、あるいは共通の原理が働いているのかといった議論は今後の研究に残すことにする。

注

- 1 以下、束縛変項解釈は wh-句/QP との同一指標 (coindex) により表す。
- 2 QP は数量詞繰り上げ (QR) (May 1977) により TP に付加すると考える。
- 3 束縛 (binding) は(i)の定義に基づき、また、c-統御 (command) は(ii)の定義に基づく。
 - (i) X binds Y iff (a) X and Y are coindexed, and (b) X c-commands Y.
 - (ii) α c-commands β iff every branching node that dominates α also dominates β .
- 4 通例、QR は節を超えることはできないが、不定詞節では上位節に付加できることは、以下の例により示される。
 - (i) a . I told someone you would visit everyone.
some > every, *every > some
b . Someone wanted to visit everyone. some > every, every > some

(Johnson 2000 : 188)

- 5 NO を想定しない分析として Hornstein (2001) がある。本稿ではその詳細に立ち入らないが、Hornstein の分析でも特に (15d) と (17a) との違いを説明するのに (16) に類する規定を要する。
- 6 むろん、これは (17) を束縛条件 C のみで捕えようとする分析に対する問題の指摘である。(17a)/(19a) の非文法性が束縛条件 C によらず独自に捕えられるなら、(16) でその非文法性が捕えられないこと自体は問題ではない。しかし、(16) が痕跡変項の分布を説明するためだけに束縛条件に特別な規定を盛り込んでいるという理論的な問題は依然として残る。
- 7 この点は以下のように目的語以外でも寄生空所を c-統御していない限り寄生空所を認可する痕跡変項となりうることから示される。
- (i) a. Who_i did you stay with t_i [without your talking to e_i]
 b. Which book_i did John decide to tell his secretary [t_i was unavailable] [before reading e_i] (Lasnik and Stowell 1991 : 712)
- 8 (24) を MP の照合理論でおきかえた分析 (Kawashima and Kitahara 1992, Nishioka 1994) も NPI の否定要素による直接的な c-統御に基づく限り、同様の問題をもつ。
- 9 Pol 想定独自の証拠については Culicover (1991), Nishioka (2002a) 参照。
- 10 Agree については、Chomsky (2000, 2001) 参照。それを援用した技術的なメカニズムについては西岡 (2002)、Nishioka (2002b) 参照。
- 11 ここで α , β , γ が順に非対称的に c-統御する場合、 β は α と γ の経路にあると定義する。
- 12 付加構造の分節 (segment) は、支配 (dominate) しないという仮定 (Chomsky 1986b) に基づくと、(42a) において NO が Subj. を非対称的に c-統御していることに注意されたい。(注 3, 11 参照。)
- 13 (42b) において Obj. と NO は、相互に c-統御しているため、NO が Obj. とその痕跡位置 (t_{obj.}) の経路にはないことに注意されたい。(注 11 参照。)

参考文献

- Acquaviva, Paola (1997) *The Logical Form of Negation*, Garland Publishing, New York & London.
- Baltin, Mark (1982) "A Landing Site Theory of Movement Rules," *Linguistic Inquiry* 13, 1-38.
- Boeckx, Cedric (2000) "A Note on Contraction," *Linguistic Inquiry* 31, 357-366.
- Bruening, Benjamin (2001) "QR Obeys Superiority: Frozen Scope and ACD," *Linguistic Inquiry* 32, 233-273.
- Chomsky, Noam (1977) "On Wh-Movement," *Formal Syntax*, ed. by Peter Culicover, Thomas Wasow, and Adrian Akmajian, 71-132, Academic Press, New York.

- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht, The Netherlands.
- Chomsky, Noam (1986a) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1986b) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*, Praeger, New York.
- Chomsky, Noam (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, ed. by In K. Hale and S.J. Keyser, 1-52. Cambridge MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step*, ed. by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 98-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam and Howard Lasnik (1993) "The Theory of Principles and Parameters," *Syntax: An International Handbook of Contemporary Research*, ed. by J. Jacobs, A. von Stechow, W. Sternefeld, and T. Vennemann, 506-570, de Gruyter, Berlin.
- Culicover, Peter (1991) "Polarity, Inversion, and Focus in English," *Proceedings of the 8th Eastern States Conference on Linguistics*, 46-68.
- Haegeman, Liliane (1995) *The Syntax of Negation*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Hoeksema, Jack (2000) "Negative Polarity Items: Triggering, Scope, and C-Command," *Negation and Polarity*, ed. by Laurence R. Horn and Yasuhiko Kato, 115-146, Oxford Univ. Press, Oxford.
- Hornstein, Norbert (2001) *Move! A Minimalist Theory of Construal*, Blackwell Publishers, Malden, MA.
- Johnson, Kyle (2000) "How Far Will Quantifiers Go?" *Step by Step*, ed. by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 187-210, MIT Press, Cambridge, MA.
- Kawashima, Ruriko and Hisatsugu Kitahara (1992) "Licensing of Negative Polarity Item and Checking Theory: A Comparative Study of English and Japanese," *Proceedings of Formal Linguistic Society of Mid-America* 3, 139-154.
- Klima, Edward E. (1964) "Negation in English," *The Structure of Language*, ed. by Jerry A. Fodor and Jerrold J. Katz, 246-323, Prentice-Hall Inc., Englewood Cliffs, NJ.
- Kuno, Susumu (1995) "Negative Polarity Items in Japanese and English,"

- Harvard Working Papers in Linguistics* vol. 5, ed. by Samuel D. Epstein et al.
- Laka, Itziar M. (1990) *Negation in Syntax: On the Nature of Functional Categories and Projections*, Doctoral dissertation, MIT.
- Larson, Richard K. (1988) "On the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 19, 335-392.
- Lasnik, Howard and Mamoru Saito (1992) *Move α* , MIT Press, Cambridge, MA.
- Lasnik, Howard and Tim Stowell (1991) "Weakest Crossover," *Linguistic Inquiry* 22, 687-720.
- May, Robert (1977) *The Grammar of Quantification*, Doctoral dissertation, MIT.
- Miyagawa, Shigeru (1997) "Against Optional Scrambling," *Linguistic Inquiry* 28, 1-25.
- Nishioka, Nobuaki (1994) "Improper Movement and Polarity Items in English and Japanese," *English Linguistics* 11, 1-28.
- Nishioka, Nobuaki (1997) "On Trace Movement," *English Linguistics* 14, 182-202.
- 西岡宣明 (2002) 「否定対極表現の認可と再構築現象について」 *JELS* 19, 156-165.
- Nishioka, Nobuaki (2002a) "In Defense of PolP in English," *Studies in Literature* 99, Kyushu University.
- Nishioka, Nobuaki (2002b) "Sentential Negation, Negative Polarity Items and the Reconstruction Effects," ms., Kyushu University.
- Ota, Akira (1981) "Semantic Interpretation of NPs Containing *No*," *Sophia Linguistica* 7, 13-28.
- Postal, Paul (1971) *Cross-Over Phenomena*, Holt, Rinehart and Winston, New York.
- Richards, Norvin (1997) *What Moves Where in Which Language?* Doctoral dissertation, MIT.
- Wasow, T (1972) *Anaphoric Relations in English*, doctoral dissertation, MIT.
- Zanuttini, Raffaella (1997) *Negation and Clausal Structure: A Comparative Study of Romance Languages*, Oxford University Press, New York/Oxford.